
やさぐれ世界童話【短編集】

無名 新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やさぐれ世界童話【短編集】

【Nコード】

N0879J

【作者名】

無名 新人

【あらすじ】

思いつくままなぶるように、世界の童話をパロディしてみました。
一話完結の短編集。

道頓堀の桃太郎（前書き）

今回は横書きでお楽しみください。

道頓堀の桃太郎

むかーしむかし。

あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

おじいさんは六甲山まで虎狩りに。

おばあさんは道頓堀へ洗濯に行きました。

洗濯の帰り道。

ふと橋の上で川を眺めていたら。

どんぶらこー

どんぶらこー

と、やたらでかい桃が川を流れて来るではありませんか。

（あれやったら、三日分ぐらいにはならしまへんやろか？）

けれども、川まで戻っている間に桃は通り過ぎてしまいそうです。

おばあさんは橋の上から川を見下ろしました。
真冬の道頓堀は言うまでもなく寒そうです。

おばあさんは手すりに手を置いたまま、しばらく考えました。

どんと視界の中で大きくなってくる桃。

おばあさんは決断しました。

「とおっ……りゃあああああああああっ！」

道頓堀におばあさんの絶叫が響き渡ります。
まるで断末魔の叫びのようです。

ずばあんという何かが優勝したときの光景を彷彿とさせる、盛大な水しぶき。

風を纏ったおばあさんは、穿つように川へ吸い込まれていきました。

「うおあう……ああうあ……いあうあつぶ」

おばあさんは死の淵を彷徨いました。

道頓堀の川辺に横たわるおばあさんと桃。
奇跡的におばあさんは助かりました。

どうやって助かったのかはわかりません。

「ひいいい……ふうふうふう………」

おばあさんはがちがちと寒さに耐えながら桃を押していました。
目指すは一里先にある我が家です。

あ。一里つて4kmくらいだそうですよ。

「ふぐぐう……ふはあああ………」

桃はほんの少しずつしか動きません。
おばあさんの手が、肩が、足が。
ふるふると震えています。

おばあさん、がんばれ。

おばあさん、がんばれ。

おばあさん、がんばれ。

おばあさんが家へ着いた頃には日が暮れていました。
家に着いた途端、おばあさんは音もなくうつ伏せに倒れました。
どうやら燃え尽きたようです。

おばあさんがぐったりしていると、おじいさんが帰ってきました。
そして一言。

「メシ」

熟年の夫婦間の会話でした。

おばあさんが俯いたまま大きな桃を指差しました。
なにひとつとん、と舌打ちするおじいさん。

おじいさんは出刃包丁を持って桃の前に立ちました。

「ふんっ！」

気合一閃。

大きな桃は真ん中からすっぱりと両断されました。
桃の片割れが重力にしたがってずれ落ちていきます。

すると桃の中から――

「おっさんなにすんねん！頭までぱっくり割れてまうやろが！！」

包丁の刃を紙一重で見切った小さな男の子が。

「なんやおもろいやつ出てきよったぞ」

おじいさんとおばあさんは男の子を大切に育てることにしました。

「名前はどうしましょうかね」

いつの間にか、魂の戻ってきたおばあさんが言いました。

「桃太郎だ」

男の子が言いました。

「キヨハラがええわ」

おじいさんが言いました。

なるほど、虎を狩るわけです。

男の子はすくすくと育ちます。
一年で少年へと成長しました。

なぜ一年なのか。

それはきっと、大人の事情です。

「忘れもんじゃないか？」

戸口に立ったおばあさんが名残惜しそうにしています。
すっかり口癖になった言葉を少年にかけました。

「やかましわ」

少年は反抗期でした。

おばあさんには一瞥もくれません。

「行つてこい、キヨハラ」

少年は球を打ったり投げたりするものの特訓を受けていました。

「けっ」

少年は吐き捨てるように出て行きました。

おじいさんはその背を、どこかへ送り出すように眺めていました。
そう、どこか別の場所へ……。

少年は冬の寒空を歩いていました。

北風が吹き荒ぶ、だだっ広い雑草が生えているだけの砂利道に行く。

少年は少し震えながら、旅の目的を考えていました。

ゆめしま（夢洲）という人の寄り付かない島。

広大で何も無い島に、いつ頃からか鬼たちが住み着いていました。

そうして、夢洲は鬼ヶ島というベタな名前で呼ばれるようになっていました。

その鬼たちが近隣住民の金銀財宝を奪い、さらには姫君をさらっていったというのです。

子沢山の殿様は何とか奪い返そうとしました。

しかし、鬼たちの抵抗が激しく、手こずってしまいます。

そこで、お触れを出して一般の人にもお願いすることにしたのです。

もうすぐ日が昇りきる頃でしたが、頬に当たる風は切り裂くように通り過ぎていきます。

おじいさんに無理やり渡された黒い兜やつるつとした黒と橙の服、金属製の棒は捨ててきました。

ときたま、通りすがりのおっちゃんが「いてこましたるか」と仇のように睨んでくるからです。

「キヨハラ、キヨハラ」

考え事をしていた少年に、ふとどこからか声が聞こえてきました。

「誰がやねん」

言いながら、少年は辺りを見回します。
すると、足元に一匹の小さなブルドックが。

「きび団子くれ」

事も無げに言いました。

ブルドックがしゃべっています。

不思議なブルドックがいたものです。

そもそもなぜ昔の日本にブルドックがいるのでしょうか。
わかりませんね。

「そんなん持ってへんわ」

ブルドックに驚きながらも、少年は答えました。
事実、持っていないのです。

あるとすれば、おばあさんが渡した——かりんとうだけ。

ブルドックは物欲しげに少年を見つめました。
つぶらな瞳で、くうーんと鳴きます。

しかし少年には、しかめっ顔で唸っているように見えました。

「ないもんはないねん」

少年はブルドックを追い払おうとしました。
そのまますたと歩いていきます。

すたすた。

すたすた。

「どっかいけや！」

ブルドックは少年の後をずっと付いてきていました。
何かよこすまで付いてくるつもりようです。

（こいつ、かりんとうに氣いついとんな）

せやったらなんできび団子言うてん、と少年は思いつつ、かりんとうをひとつブルドックへ投げました。
途端、むしゃぶりついたブルドック。

あっという間に食べ終わりました。

あ。実際にブルドックにかりんとうをあげてはいけません。
きつと無反応です。

満足したブルドックは、帰ろうとしました。
しかし。

「どこ行く気や」

「こふっ」

ブルドックは少年に首根っこを掴まれました。

「誰がただでやる言った、こら」

そのままブルドックは引っ張られていきました。

世の中甘くありません。
皆さんも注意しましょう。

「キヨハラ、キヨハラ」

また足元から少年に声がかけられました。

「桃太郎やって」

あのくそじいが、と罵りました。

少年はすっかりキヨハラとして名が広まっていました。

「きび団子くれ」

またか、と少年はため息を吐きました。

「他を当たれ。しっし！」

少年はブルドックを振り回して追い払おうとしました。
しかし、わずかに後ろへ下がられただけです。

そしてそのまま通り過ぎましたが、やっぱり付いてきました。

「なんやねんな、もー」

少年はかりんとうを投げてよこすと、ひとのみにしてしまいました。

「ありがとう、それじゃ」

かりんとうを食べてさっさと帰ろうとしました。

「まて」

「ふっ」

少年は空いてる方の手で首を掴みました。

「羽広げても無駄やぞ」

今度は小さな孔雀でした。

実際にかりんとうを孔雀にあげてはいけません。
念のため、一応。

「おまえも来い」

ブルドックと孔雀を両手に抱え、少年はさらに突き進んで行きました。

「キヨハラ、キヨハラ」

またもや少年の足元から声がしました。

「……………」

少年は通り過ぎていきました。

「キヨハラー！キヨヨーハラー！」

少年の足元にまわりつきながら、叫ぶように言いました。

「……………」

少年は止まりませんでした。

「呼んでるよ、キヨハラ」

左手に抱えたブルドックがそつと話しかけます。

この犬ところが、と舌打ちして少年は立ち止まりました。

「きび団子よこせ」

今度はよこせときたか。少年は睨みつけました。
とりあえずもう、しゃべっていることもなぜきび団子なのかも、ど
うでも良いようです。

「な、なんだよキヨハラ」

たじろぐ相手に、少年は面倒そうに口を開きました。

「もんひとふもなひわ」

少年は、ばりばりかりんとうを食べていました。

そしてそのまま少年は無視して通り過ぎようと思いました。

「さてよ、鬼退治だろ？手伝ってやるよ」

まだ足元にまわりついていました。

「間に合うとる」

少年が両手のブルドックと孔雀を掲げます。
確かに、もう持てませんね。

「そう連れないことを言うなよ。俺は役に立つぞ」

「もういらんて」

なおも食い下がられる少年。

「それにおまえ、普通のサルやしな」

ぼそつと少年が言いました。

そう。まわりついているのは、ただのニホンザルでした。
おこがましいですね。

「そういうわけで、おとといきやがれ」

少年はひらひらと孔雀を振り、さいならと言いました。

「こ、この……！」

サルは少年に跳びかかりました。
首に両手を回してぶらさがります。

「ちっ！しゃーないやつちな」

しかし、少年は拒みませんでした。
首に回されたサルの手が、寒さをしのぐのにちょうどよかったからです。

サルはタダで働くことになりました。

こうして、少年と三匹は鬼ヶ島へ向かいました。

——鬼ヶ島——

まるで廃墟のような打ち捨てられた施設が、ぽつりぽつりとまばらにある夢洲。
広大な空き地に鬼たちが蠢いている。

「たのもーっ!!」

ブルドックを掲げた少年が堂々と正面から殴りこみをかけた。

「なんじゃ、こいつは……………」

「犬……………」

「なんで孔雀が」

「なんか負ぶつとんぞ」

鬼たちは度肝を抜かれた。

「コケッ？」

その隙に少年は孔雀を投げつける。
そして腰の刀をぱさりと抜く。

「ぱさり……？」

鞘から抜かれた刀は、扇のように広がった。
紙で出来ている。

おばあさんの持たせてくれたものだ。

いくら鬼だからといって、殺つてはいけない。

「……やったるうやないか」

少年はぐつと紙で出来た刀を握り締めた。

「コケー！コケコケッ！」

孔雀がばっさばっさして暴れているのに気をとられていた鬼。
少年はその鬼を見据え、紙で出来た刀を振りかぶって駆ける。

「よつと！」

後頭部に勢い良く紙で出来た……ああーもうめんどくさい。
後頭部に勢い良くハリセンが命中する。
ぱかんと軽快な音がなった。

「ぐああ……」

めり込むように倒れる鬼。

「……なんでやねん」

そんなんでも倒れるてなんやねん、と少年の決め台詞が響く。

鬼たちがざわめいた。
身構えて、次々と少年に襲いかかる！

「こなくそ！」

右から突っ込んで来た鬼にハリセンの一撃。

「おらあ！」

気合とともに少年は左後方の鬼にブルドックを振りかざした。
眼前にブルドックの顔を突きつけられ、「はっ！？」と思わずたじろいだ鬼。

「せいっ」

少年はハリセンで沈める。

「キヨハラ、後ろ後ろ！」

「誰がキヨハラやねん！」

と振り向いてブルドックをけしかける。
続けざまにハリセンのぱしんという音が鳴った。

「キヨハラ、左だ！」

後方を見ているサルが誘導していく。
孔雀を拾い上げるキヨハラ。

「俺は桃太郎やっちゅーねん！」

……えー。桃太郎は孔雀を鬼に突きつける。
孔雀は鬼の腕をついばんだ。

「いててててて！」と情けない声を上げる鬼。

「やかましわ！」

少年はハリセンで黙らせた。

「おまえらやる気あんのか！」

少年は鬼たちをばっさばっさと——いや、ぱしんぱしんと倒していった。

「あーしんど」

あたりに立っている鬼たちはいなくなりました。

そのとき、

「助けてくれて、ありがとうございました」

物陰から姫様が現われました。

「お、ちょうどええわ」

少年は待つてましたとばかりに言いました。

「金目のモンでどこにあるか知つとる？」

姫様には興味がないようです。

少年は硬派でした。

「あちらの建物に……」

姫様が指を差します。

「あ、そう。ほなね」

少年と三匹はまっしぐらに金銀財宝へと向かいます。

あとには、ぽかんとした姫様の姿が夕日に映っていました。

「鬼倒したんは俺やろうが！」

「オレの睨みが効いたんだよ！」

「いやいや、僕のくちばしが」

「俺の誘導は？」

「おまえはぶら下がってただけやる！」

無事宝を持ち帰った少年たちは、分け前をどうするかで争っていました。

奪われた人たちに返すという選択肢がありません。

そんな様子を、おじいさんはじっと傍らで見っていました。

「財宝を返すじゃと？」

宝物はとうに諦めていた殿様。

「左様で」

おじいさんが少年たちに気づかれないう、価値のある財宝だけを抜き取って持ってきていました。

「ただ、条件ありまっけど」

おじいさんはそう付け加えました。

——五年後——

「おう、お疲れさん」

少年は大人になりました。

「お疲れー」

「今日もすごい活躍だったね」

ブルドックと孔雀も健在でした。

「おまえら、今日はウチ来るか？」

桃太郎は付き合いの長い二匹に声をかけます。

「いや、遠慮しとく」

孔雀は首を振りました。

「姫様に悪いし」

ブルドックも断りました。

なんだかんだで、桃太郎と姫様はうまくいっていました。

「そうか、また今度な」

桃太郎は少し残念そうに言いました。

「あ、そうそう。今日でちょうど五年だよね」

ふいに、孔雀が言いました。

ここはかつて鬼ヶ島と呼ばれていた場所。
そして今は、球を打ったり投げたりする見せ物を催す施設になって

いました。

一度に四万人まで入ることが出来ます。

ずっとおじいさんに訓練を受けていた少年は、大人になってからここで大活躍していました。

ブルドックと孔雀は、名物として働いています。

周辺も様々なものが建ち並び、少しずつ賑わい始めていました。

「懐かしいな」

ブルドックが目を細めていました。

「とりあえず、くそじじいには感謝しとるわ」

桃太郎が、全とおじいさんの仕業だと気づいたのは最近でした。

「あれ？なんか忘れてるような……」

孔雀が首を捻ります。

「うーん？」

ブルドックもわからないようです。

「まあええんちゃう。めでたしめでたしや」

桃太郎が、にっと笑いました。

——めでたし、めでたし——

——某所・深夜——

「おい、まだかサル！」

「すみません、あと三十分です！」

急がされながら、あくせくと働くニホンザル。

（そうだ。今日で五年か）

サルは疲れた頭でぼんやりと昔の冒険を思い出しました。

（懐かしいな……）

「おら、なにぼーっとしてんだ！」

「あ、すみません！」

サルは今日もタダ働きをしています。

道頓堀の桃太郎（後書き）

童話のように、示唆といいますが暗喩している部分を色々とちりばめてみました。一部社会風刺感もあつたりして「あ。まずい」などとぼかしぼかし。

しかし、それらが伝わらなくても、単純に楽しめる作品であれば良いなと書きながら思ったしだいでございます。

以上、あとがきでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879j/>

やさぐれ世界童話【短編集】

2010年10月10日11時21分発行